

トマジウスとカントの啓蒙思想

高木裕貴（京都大学）

多くの人は、「ドイツ啓蒙」と聞けば、まずもってカントの『啓蒙とは何か』を思い浮かべるであろう。しかし、カントやメンデルスゾーンの啓蒙思想は、ドイツの「後期啓蒙」に位置するものである。では、ドイツの「初期啓蒙」とは何であったか。

その答えは、「ドイツ啓蒙の父」と呼ばれるクリスチャン・トマジウス（1655-1728）にある。トマジウスは、同じドイツにおけるライプニッツやカントの陰に隠れてしまい、さほど注目されていないが、ドイツ啓蒙の立役者とされているのである。

もちろん、トマジウスはプーフENDORFに影響を受けた法学者として注目されることはある。しかし、ドイツ啓蒙の父トマジウスの啓蒙思想は、実はさほど研究されておらず、その全貌はヴェールに包まれたままなのである。トマジウスが保守的なライプツィヒ大学においてラテン語ではなくドイツ語で講義を行うという公布を大学の掲示板に掲載したという、当時にとってはスキャンダラスな歴史的な事件（これがドイツ啓蒙のはじまりであった）が伝承されるのみで、肝心のトマジウスが書いた啓蒙思想については理解が進んでいない。

トマジウスの啓蒙思想を一見するとすぐに気づくのは、カントの啓蒙思想への連続性である。つまり、有名なカントの啓蒙思想も、トマジウスの影響下で成立したように思われるのである。例えば、世界 *Welt* と学校 *Schule* というカントの区別は、すでにトマジウスに見られる。

そこで本発表では、トマジウスとカントの啓蒙思想を比較することで、トマジウス啓蒙思想のオリジナリティを浮き彫りにしたい。

発表者はまず、『フランス人の模倣論』[1687/1701] を読解し、トマジウスがフランス宮廷文化を参考にして到達した啓蒙思想を明らかにする。トマジウスは、当時の大学における、実生活からかけ離れてもはや自己目的化した煩瑣な議論に固執する学校哲学（党派哲学）を批判した。大学は常に世界（世間）へと開かれねばならない。そこでトマジウスはフランスの宮廷をあるべき世界のモデルとし、世界に開かれた社会的な人物が啓蒙の理想であると考えたのである。

次に、『宮廷哲学入門』[1688/1710] において、宮廷に相応しい哲学とされている折衷哲学について検討を加える。党派性から離れて自分自身の理性を使って真理を判断すべきとする折衷哲学は、反権威の哲学であり、人間の自律的理性を信頼する啓蒙の哲学なのである。以上を総合すれば、啓蒙された人物とは、「理性的で社会的な人間」であることになろう。他方で、『理性論・入門』[1691] と『理性論・実践』[1691] を読解し、啓蒙において主題となる理性の内実を探究する。そこでは、理性とはすでに他者に向かうコミュニケーション的な性質をもつことが示される。理性使用が啓蒙であれば、その条件はコミュニケーションなのである。

最後に、トマジウスの啓蒙思想とカントの啓蒙思想を比較する。現在のところ、両者には多くの共通点（例えば、啓蒙をコミュニケーション的に捉える点）があるものの、哲学の通俗性という相違点があるのではないかと見込んでいる。